



卒業おめでとう こども記者6年生の思い出



阿部知事へのインタビューが心に残っている。県がどんな政策をやっているか学べたし、学級長になるためにはどうすればいいか聞いた。
(小諸市・饗場己武)

ハロウィーンでお菓子を作ってこども新聞で紹介してもらったことが楽しかった。
(中野市・湯本鈴花)

茅野市で開かれた「縄文の夏祭り」で料理づくりをした。エコな調理方法も分かったし、自分で食べてみたらおいしかった。
(長野市・西田瑞希)

中学生になったら新聞のスクラップに挑戦したい。こども記者クラブ、これからも続けていってください。「継続は力なり」です！
(長野市・和田夏弓)



バイオリンのお医者さんの取材教室で、「バイオリンドクター」の中沢宗幸さんと仲良くなれたことが思い出。
(安曇野市・横内慎太郎)

こども記者クラブに参加している職業の方にお会いでき、お話を聞いたり実際に体験できたことがとても楽しかった。
(長野市・セイレーン)

上田城と諏訪湖で写真を撮って、自分だけの新聞を作った写真教室が印象に残っている。取材の楽しさを知ることができてよかったです。
(長野市・小田切麗親)



俳句を学ぶ取材教室に何回か参加したのが楽しかった。その後、学校で俳句をつくった時に、とてもうまくよめました。
(長野市・メガネさん)

阿部知事に会って取材したことが心に残っています。たくさん質問に答えてくれて、ほくも長野県のために何かできたらな、と思いました。こども記者をやったたくさんの人と出会い、自分の世界がとても広がりました。
こども記者同士の仲を深める会なんてのもあったらいいと思います。
(伊那市・Steve)



長野県内の小学校の活動が紹介されてとても面白かった。私の学校にも取材が来てほしいな。
(松本市・ナカヤン)

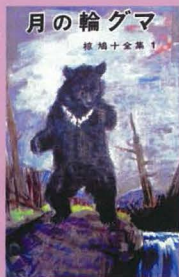
軽井沢町の大賞ホールでイギリス人指揮者、ダニエル・ハーディングさんに話を聞いた。その時に聴いたオーケストラがとてもきれいだった。
(塩尻市・御子紫彩葉)

脚本家の小林雄次さんに話を聞いたことなどが思い出です。学校ではできないことを経験することができてよかったです。
(長野市・塚田優希)



椋鳩十全集 ①月の輪グマ

ほくの紹介する本は、下伊那郡喬木村出身の椋鳩十さん(1905~87年)の作品を集めた椋鳩十全集です。1~26巻まであって、ほくは全部読みました。特に好きなのは1巻「月の輪グマ」です。



おすすめのポイントは、どの巻も自然の中での動物と動物、動物と人間のかかわりがえがかれている所です。1巻の「大造いさんとガン」や「片足の母ズメ」などは、仲間や子どもを守るという感動的な場面があります。「栗野岳の主」などは、人間を相手に立ち向かっていく勇気ある場面があります。

ほかの巻も、自然の中で動物が生きていく知恵など本当にあった話がたくさんあって面白いです。一番後ろには、児童文学研究者の鳥越信さんや児童文学評論家の横谷輝さんなどの解説があつてよく分かるので、小さい子でも分かると思います。ぜひ読んでみてください。
(著者 椋鳩十、発行所 ポプラ社)

赤井峻真記者 長野市5年

本のひとびと

岡谷市の宮坂製糸所と岡谷蚕糸博物館に行ったことが心に残っている。日本唯一の、手作業で生糸を取る製糸工場を見たり糸のりの女性を初めて見て、昔の人は頭がいいなあと思った。
(須坂市・小坂泰士)

思い出は、弟と二人で電車に乗って取材教室に行ったことやお弁当を分けてもらったこと。取材教室では、知らなかったことが分かったりしてとても楽しかった。
(長野市・加藤大貴)

浅間山に登り、取材をした。冬ですべては転び…をくりかえしながらの取材でした。黒斑山の山頂では、浅間山の冬景色が美しく、疲れがふきとぶほどでした。たくさんの取材に参加し、どれも充実していたためになり、宝物となりました。
(小諸市・柳沢星奈)

6年生のみなさん、こども記者として活やくしてくれてありがとうございました。好奇心、探求心が旺盛なみんなの取材活動のおかげで、楽しいこども新聞を作ることができました。今後も、これまでのように、いろいろなことにチャレンジしていきましょう!!

もし記者じゃなかったら

乗り物が大好きなので

読者センターの仕事のひとつに、小中学校などを訪問して新聞作りや新聞の読み方を児童・生徒に教える「出前授業」があります。新聞や教材もたくさん持って行くので、移動には車が欠かせません。1日に400キロ近く走る日もあります。「大変だなあ」と思うかもしれませんが、私は車の運転がそれほど苦になりません。小さな頃から、乗り物が大好きだったからです。

生まれた当時、家には車はなかったのですが、父は「メグロ」という大きなオートバイに乗っていました。家の前は国道が通っていて、毎日いろんな車をながめていました。小学生の時に買ってもらった百科事典の「のりもの」の巻は、ぼろぼろになるまで読んで、今でも実家の本棚にあります。当時は車でもオートバイでも、モデルチェンジすると必ずエンジンの性能が向上して、デザインもかっこよくなりました。とても夢のある時代でした。

そんな子供時代を過ごしたので、自動車レーサーのように乗り物を運転する人とか、エンジンの設計者に興味を持っていました。

ではどうして新聞社に入ったのかというと、受験した大学が当時、非常に

ユニークな入試を始めて、世間からとても注目されたことが要因です。大学に入ってから、芸能人や会社の社長さんを講師に招いたり、教員を一般公募したりという取り組みがあり、そのたびに新聞社やテレビ局の人が大勢取材に来ました。わたしも取材を受けてテレビに出たこともあります。そんな人々と接して、仕事ぶりを見て「こんな仕事してみたいな」と思うようになってきたのです。

ちょうどその頃から、車を取り巻く環境も変わってきました。排ガスのきれいさとか、燃費の良さが重視されるようになり、スピードとか、カッコよさといった「夢」のある部分が小さくなってきていたのです。それはそれで大事なことはあるけれどね。でも、今でも乗り物が好きなことには変わりはありません。車やオートバイの整備にはこだわりをもっているし、人を乗せる時はその人が気分良くいられるように、優しい運転を心がけています。

読者センター 吉沢 秀樹

